

フランス語における中性代名詞クリティック "y", "en" について

その他（別言語等） のタイトル	Neuter Clitics "y", "en" in French
著者	藤田 健
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	48
ページ	169-178
発行年	1998-11-13
URL	http://hdl.handle.net/10258/2857

フランス語における中性代名詞 クリティック “y”, “en” について

藤田 健*

Neuter Clitics “y”, “en” in French

Takeshi FUJITA

(原稿受付日 平成10年 5 月 8 日 論文受理日 平成10年 8 月31日)

Abstract

French neuter clitics, “y” and “en”, are used as pro-forms of prepositional phrases. When they appear in a causative construction, they demonstrate a complex pattern of grammatical characteristics. The aim of this article is to make clear syntactic properties of “y” and “en” as pro-forms of prepositional phrases in terms of a framework of the Generative Grammar, Minimalist Program in Chomsky(1995). I argue that the licensing condition of the neuter clitics is that they must be incorporated into the verb complex in overt syntax without being Case-checked, unlike object clitics which must be Case-checked. This condition and the analysis of the causative construction in French presented in this article enable us to explain the intricate distribution of “y” and “en” in a causative construction straightforwardly without any special movement rules.

Key words : French, neuter clitic, causative construction, Generative Grammar

1. はじめに

フランス語には、動詞に音韻的に依存する形で生起する代名詞クリティックが存在する。この代名詞クリティックは、動詞の直接目的語及び間接目的語のように項として機能するクリティックと、それ以外の要素として機能する中性代名詞クリティックに大別することができる。本稿は、使役構文という環境における分布を観察することによって、Chomsky(1995)⁽¹⁾において提唱されている、生成文法の最新理論である最小主義理論(Minimalist Program)に基づき、中性代名詞クリティック“y”及び“en”の統語的性質を明らかにすることが目的である。

中性代名詞クリティックには、“le”、“en”、“y”の三つが

あるが、“en”と“y”はいずれも特定の前置詞句を受けるといふ共通性をもっている。この二つの中性代名詞クリティックは、動詞“faire”を用いる、倒置を含む使役構文において、目的語代名詞クリティックと異なる分布を示す。以下では、まず中性代名詞クリティック“y”、“en”の機能を概観し、使役構文における分布を観察する。次に、本稿の使役構文に対する分析を提示する。最後に、中性代名詞“y”、“en”の統語的特性を考察する。

2. 前置詞句を受ける中性代名詞 クリティック“en”、“y”

中性代名詞クリティック“en”と“y”は、一般に副詞句を受けるといふ点で、目的語代名詞と機能を異にする。この二つの中性代名詞クリティックに共通するのは、特定の前置詞句を受けるといふ機能をもつということである。前置詞句は、

*共通講座

目的語や補語に比べ、動詞との意味的關係が希薄であると考えられる要素である。実際、統語的には、動詞から意味役割を受ける要素であっても、動詞句において素性照合は行われない。このことから、前置詞句を受けるクリティックがどのような認可条件を持つのが非常に興味深いところである。なお、“en”にはこの他に、名詞句の一部を受ける用法や、不定の名詞句を受ける用法があるが、本稿ではこれらの用法に関しては現象の観察にとどめ、詳細な検討は別稿に譲ることとする。

2. 1. “en”と“y”の機能

“en”は、基本的には前置詞“de”によって導かれる前置詞句を受ける。(2)は、(1)の文における前置詞句を“en”で受けた例である。

(1) a. J'ai parlé de mon ouvrage.

I spoke of my work

“私は自分の仕事のことを話した。”

b. Il est content de son succès.

he is pleased of his success

“彼は自分の成功を喜んでいる。”

c. Je vous remercie beaucoup de votre aimable

I you thank much of your kind

invitation.

invitation

“ご親切にご招待いただき、大変感謝しております。”

(2) a. J'en ai parlé.

I of-it spoke

b. Il en est content.

he of-it is pleased

c. Je vous en remercie beaucoup.

I you of-it thank much

“y”は、基本的に前置詞“à”によって導かれる前置詞句を受けるが、“à”以外の前置詞によって導かれる、場所を表す前置詞句も受ける。(4)は、(3)の文における前置詞句を受けた例である。

(3) a. Il manque trop souvent à son devoir.

he disobeys too often to his duty

“彼はあまりにも義務を怠りすぎる。”

b. Vous vous intéressez à Paul?

you you interest to

“あなたはポールに関心がありますか。”

c. Elle habite en France.

she lives in France

“彼女はフランスに住んでいる。”

(4) a. Il y manque trop souvent.

he to-it disobeys too often

b. Vous vous y intéressez?

you you to-it interest

c. Elle y habite.

she there lives

このように、「前置詞+名詞句」全体を受けるという点で、通常の代名詞とは大きく異なる。また、特定の前置詞句を受けるという意味において、英語における副詞句を受ける“there”とも機能を異にする。

2. 2. 動詞“faire”を用いる使役構文

フランス語の使役構文は、英語と同様、不定詞補文を含む。ただし、英語と異なり、2種類の語順が存在する。

一つは、英語における例外的格標示構文と同じように、主文の動詞に被使役者名詞句（以下 causee）、不定詞の順で後続するタイプである。これは、動詞“laisser”を用いる使役構文である。この語順は使役構文の他に、いわゆる知覚動詞構文にも見られる。このタイプの場合、causee は前置詞を伴わない。

(5) a. Il laissera son ami manger les gâteaux.

he will-let his friend eat the cakes

“彼は友人にケーキを食べさせるだろう。”

b. Il a laissé son ami partir.

he let his friend leave

“彼は友人に出発させた。”

もう一つのタイプは、causee が補文の動詞に後続し、補文の動詞の種類によって causee のマーキングが異なるというものである。これは動詞“faire”を用いる場合には義務的な語順であり、前述の動詞“laisser”や知覚動詞を用いた構文でも随意的に見られる語順である。このタイプの場合、補文の動詞の種類と causee の間に以下のような関係が見出される。補文の動詞が自動詞の場合、(6a)のように causee は動詞に後続しなければならない、(6b)のように動詞に先行する語順は不可能である。この場合、補文に含まれる前置詞句は causee に後続しなければならない、(6c)のように causee が前置詞句に後続する文は非文である。

- (6) a. Jean a fait sortir Marie de sa chambre.
made leave of her room
“ジャンはマリを部屋から出させた。”
b. *Jean a fait Marie sortir de sa chambre.
c. *Jean a fait sortir de sa chambre Marie.

補文の動詞が他動詞である場合、(7a)のように causee は前置詞“à/par”を伴って生起し、動詞句に後続しなければならない。(7b,c,d)のように前置詞を伴わずに生起している文は非文である。

- (7) a. Jean a fait manger ce gâteau à/par Pierre.
made eat this cake to/by
“ジャンはピエールにこのケーキを食べさせた。”
b. *Jean a fait Pierre manger ce gâteau.
c. *Jean a fait manger Pierre ce gâteau.
d. *Jean a fait manger ce gâteau Pierre.

このように、“faire”を用いる使役構文は、補文の種類によって項となる名詞句の格が替わるという、統語的に特殊な構文であると言える。従って、動詞に依存する形で生起する代名詞クリティックの特性を観察する上で、極めて興味深い環境を提供するのである。

2. 3. 使役構文における“y”、“en”の分布

では、動詞“faire”を用いる使役構文において、中性代名詞クリティック“y”, “en”が補文内の要素として生起した場合、どのような分布を示すだろうか。次の例に示されるように、主文の動詞、補文の動詞いずれにもクリティック化が可能となる。以下の例は、Rouveret and Vergnaud(1980)^②からの引用である。

- (8) a. On essaiera de faire en parler ton ami.
one will-try of(to) make of-it speak your friend
“皆は君の友達にそのことを話させようとするだろう。”
b. Elle fera en sortir Jean.
she will-make of-it go-out
“彼女はジャンをそこから出させるだろう。”
c. Marie a fait y acheter ces livres à
made there buy these books to
Jean.
“マリはジャンにそれらの本をそこで買わせた。”
d. Marie a fait y aller Jean.
made there go
“マリはジャンをそこに行かせた。”

- e. Cela fait y penser tout le monde.
that makes to-it think everybody
“それによって、皆そのことを考えている。”

- (9) a. On essaiera d'en faire parler ton ami.
of-it

- b. Elle en fera sortir Jean.

of-it

- c. Marie y a fait acheter ces livres à Jean.
there

- d. Cela y fera aller Jean.
there

- e. Cela y fait penser tout le monde.
to-it

ただし、一部の動詞の項となっている前置詞句がクリティック化される場合には、主文にクリティック化されている文は非文となる。

- (10) a. *Jean y fera comparer cette sonatine à
to-it will-make compare this sonatina to
Paul.

“ジャンはポールにこのソナチネをそれと比較させるだろう。”

- b. *Jean y fera mettre ce livre à Pierre.
there will-make put this book to

“ジャンはピエールにこの本をそこに置かせるだろう。”

- c. *Jean en fera déduire cette conclusion à
of-it will-make deduce this conclusion to
Lucie.

“ジャンはリュシーにそこからこの結論を出させるだろう。”

(Rouveret and Vergnaud(1980))

このように、前置詞句を受ける中性クリティックは、通常主文の動詞以外にクリティック化が不可能な目的語クリティックとは異なり、極めて複雑な分布を示す。これは、これらのクリティックが、それ自体で、目的語クリティックとは異なった統語的特性を持っていることを示唆している。

3. 従来の分析

前置詞句を受ける中性代名詞クリティックに関して、最も詳細な分析を提示しているのは、Rouveret and Vergnaud(1980)である。彼らは、項となっているクリテ

イックと項となっていないクリティックのふるまいの違いに注目し、項となっている前置詞句は補文の動詞から主題指標(thematic index)を受け取ると主張する。

(11) Jean y a comparé¹ ce livre Prep¹ NP

上の図で、“Prep NP”は“y”の痕跡を表し、“1”が主題指標を表す。この主題指標が前置詞句に与えられた場合、主語がその文を不透明な領域にする要素として機能する。従って、(11)が使役構文の補文として生じた場合、補文が不透明な領域となり、主文との関係づけが不可能になる。このため、以下の(12)(=(10))の文が非文となると説明している。

- (12) a. *Jean y fera comparer cette sonatine à
to-it will-make compare this sonatina to
Paul.
b. *Jean y fera mettre ce livre à Pierre.
there will-make put this book to
c. *Jean en fera déduire cette conclusion à
of-it will-make deduce this conclusion to
Lucie.

確かに、前置詞句を受けるクリティックのみを観察した場合には、この分析は明解であるように思われる。しかし、主題指標と透明性との関係についてあまり議論していないという点で、理論的には不透明な部分が残る。更に、経験的に問題となるのは、目的語クリティックのふるまいとの整合性である。補文の動詞の項である直接目的語は、主文の動詞にしかクリティック化できない。

- (13) a. Pierre les fera acheter à Jean.
them will-make buy to
“ピエールはジャンにそれらを買わせるだろう。”
b. *Pierre fera les acheter à Jean.
them

この場合には、動詞句として、目的語が動詞と共に移動しなければならないので、主文の動詞にクリティック化しなければならないとしている。この分析は、項でありながら名詞句と前置詞句が異なるふるまいを示すという事実に対して、それぞれの現象に合わせて別な仮定をし、両者の関係を明確に示しえないという点で、クリティック全体を見渡す観点からは妥当性が低いと言わざるを得ない。以下では、使役構文の構造を考察し、それに基づいた分析を進めていく。

4. 使役構文の構造

従来、フランス語の使役構文に関する分析は、Bailard(1982)⁽³⁾, Burzio(1986)⁽⁴⁾, Goodall(1986)⁽⁵⁾, Guasti(1996)⁽⁶⁾, 同(1997)⁽⁷⁾, Jaeggli(1982)⁽⁸⁾, Kayne(1975)⁽⁹⁾, Reed(1990)⁽¹⁰⁾, Rosen(1989)⁽¹¹⁾, Zubizarreta(1985)⁽¹²⁾, 同(1986)⁽¹³⁾等、数多く存在するが、いずれも不自然な仮定を含む、あるいは包括的な現象の説明が困難である等の問題点を抱えており、完全なものとは言えない。本稿では、使役構文の構造について、次のように仮定する。

(14) 倒置を含む使役構文の補文は TP を含まない。

(15) 倒置を含む使役構文において、動詞“faire”と補文の動詞は overt syntax において X⁰ 移動による統語的複合動詞を形成する。

ここで、TP とは時制要素 T(ense)を主要部(head)とする句であり、overt syntax とは意味解釈部門と音声部門に分かれる前の段階の統語的派生レベルを指している。この仮定に基づくと、動詞“faire”による使役構文の場合、“faire”の語彙的特性として、補文の動詞と統語的に複合動詞を形成しなければならないため、結果として補文の主語である causee と補文の動詞が倒置することになる。この考え方をとれば、後に述べるように、補文の動詞が他動詞である場合に見られる causee と補文動詞句との倒置や causee のマーキングも自然に説明される。以下で、補文の動詞が自動詞の場合と他動詞の場合に分けて、具体的な構造を提示する。

4. 1. 補文の動詞が自動詞の場合

倒置を含む使役構文では(14)の条件、すなわち補文の構造に関する特性により補文が VP となるので、補文の動詞が前置詞句を含む自動詞を例にとると、基底の構造は(16)のようになる。

- (16) [_{TP} T [_{VP} NP [FAIRE [_{VP} [NP [V PP]]]]]]

(15)の条件により、補文の動詞は主文の動詞“faire”と統語的に複合動詞を形成する。Pollock(1989)⁽¹⁴⁾が主張するように、フランス語においては時制要素の素性が強いので、主語名詞句と時制を持つ定動詞（この場合は“faire”）は、overt syntax においてそれぞれ TP 指定部と T に移動しなければならない。これは、動詞の持つ素性が名詞句の持つ素性を照合することによってその存在を認可する格照合

というプロセスを経なければならないからである。この際、動詞 “faire” は、Roberts(1991)⁽¹⁵⁾ が提案している excorporation という移動によって、複合動詞から分離し単独で移動すると仮定する。この仮定は、“faire”と補文の動詞に副詞句が介在できるという事実によって支持される。

- (17) Ils la feront sans aucun doute pleurer.
they her will-make without any doubt cry
“彼らは間違いなく彼女を泣かせるだろう。”

overt syntax における派生は以下になる。

- (18) [TP NP_i FAIRE_{Ek}-T [VP t_i [V' t_k-V₁ [VP [NP [V' t_i PP]

overt syntax においてこのような派生がなされた後、意味解釈部門である LF において、対格でマークされる補文の主語 NP が格照合を受けねばならない。そのために、補文の主語 NP は主文の VP 指定部に移動する。このようにして、最終的に得られる統語表示は(19)に示される通りである。

- (19) [TP NP_i [FAIRE_{Ek}-T [VP NP_j [t_i [t_k-V₁ [VP [t_j [t_i PP]]]]]]]

それぞれの名詞句の移動は、指定部を飛び越えていない。主文の VP に、NP_jの移動先と主語の痕跡 t_iの位置という二つの指定部が存在するが、この場合、どちらも同じ範疇に属するため、同じ領域に含まれる。従って、t_jから t_iまでと NP_jまでの近接性は同一となり、移動が満たさねばならない一般原理である、最小連結条件(MLC)の違反にはならない。従って、(19)は適切な派生となる。このことから、(18)の overt syntax に対応する(20)(=6a))の文が文法的であることが説明される。

- (20) Jean a fait sortir Marie de sa chambre.
made leave of her room
“ジャンはマリを部屋から出させた。”

本稿の構造を仮定すれば、補文の動詞と causee の倒置が複合動詞形成のための動詞主要部の移動によって生ずる結果であると説明される。余分な移動規則を一切必要とせず、簡潔に説明される。

4. 2. 補文の動詞が他動詞の場合

次に、使役構文において他動詞補文が生起する場合、どのような構造となるかを考察する。他動詞補文の場合に問題となるのは、causee が2種類の前置詞、すなわち“à”もしくは“par”によってマークされるという点である。自動詞補文の場合には causee は対格標示が可能であったが、他動詞補文の場合には不可能である。本稿では、この理由は、補文の動詞が“faire”と統語的複合動詞を形成することによって、自身の格照合能力が失われ、補文の目的語の格照合が不可能となるためであると考えられる。そのため、causee か補文の目的語のいずれかが動詞による対格照合以外の方法で認可されねばならない。

本稿では、二つの異なった派生が存在し、そのために2種類の causee のマーキングが存在することを主張する。一つは、Larson(1988)⁽¹⁶⁾ において提案されている Argument Demotion がなされた補文の構造となると考えたい。Argument Demotion とは、ある要素、例えば動詞によって θ 役割を与えられる項を、付加詞として生起するよう降格する操作を言う。英語の受動文において生起する前置詞“by”によってマークされる動作主が典型的な例である。Argument Demotion は(21)のように定義される。

(21) Argument Demotion

If α is a θ -role assigned by X_i , then α may be assigned to an adjunct of X_i .

この操作が行われると、補文の主語は PP 内に生起するので VP 指定部で格照合を受ける必要がない。この操作が適用された場合の使役構文の基底構造は(22)のように表される。

- (22) [TP [T [VP NP [FAIRE [VP [V NP] [par NP]]]]]

この構造においては、LF で VP 指定部で格照合を受けるのは、補文の目的語 NP のみということになる。Argument Demotion を受けた文において、フランス語では、動作主を表す名詞句は一般に前置詞“par”によってマークされる。これは、次に挙げる受動文において典型的に観察される。

- (23) Marie est invité par Jean.

is invited by

“マリはジャンに招待されている。”

従って、使役構文の場合にも前置詞“par”が用いられるのは何ら不自然ではない。

もう一つの異なる派生は、動詞“faire”のもつ特性によって許されるものである。本稿では、動詞“faire”には、通常

の対格名詞句を格照合できるものに加えて、対格名詞句の他に与格名詞句の照合も可能なものもあると考える。そして、与格名詞句の照合も可能な“faire”は、Kitagawa(1994)⁽¹⁷⁾が二重目的語をとる動詞に関して提案している VP-shell 構造をとっていると考えたい。VP-shell 構造とは、動詞は一つであるが、動詞句の構造としては二つの句が重なっている構造を指す。この場合、上の動詞は音韻的に空の動詞 *e* となる。本稿では便宜上、VP-shell の上の動詞句を *vP*、下の動詞句を *VP* と表記することにする。

この VP-shell の特徴は、一つの動詞でありながら、それぞれの動詞句が独自の機能を持つという点である。従って、それぞれの動詞句が別の名詞句の格照合をすることが可能となる。ここで、与格名詞句が VP-shell の上の *vP* で、対格名詞句が VP-shell の下の *VP* でそれぞれ格照合を受けるとしよう。すると、補文の主語名詞句は空の動詞 *e* の *vP* で、目的語名詞句は“faire”の *VP* でそれぞれ照合を受けることになる。これを表すと、(24)のようになる。

- (24) [TP NP_i [FAIRE_l-T [_{vP} [t_i [_{VP} NP_k [t_i [t_i-V_m [_{VP} t_j [t_m t_k]]]]]] [à NP_j]]]]

この派生において、直接目的語名詞句の移動は MLC を満たしているため、何ら問題なく文法的なのである。

以上のように考えれば、他動詞補文の場合に *causee* が自動詞補文場合と異なるマーキングで現われる理由が、一方は Argument Demotion、もう一方は VP-shell 構造という、それぞれ他の構文にも適用される一般的な操作もしくは構造によって簡潔に説明される。この場合にも、余分な移動規則は全く不要となるのである。

5. 中性代名詞クリティック “y”、“en”の統語特性

次に、本稿の中心的なテーマである中性代名詞クリティックの統語的特性を、使役構文における分布を基に考察していく。既に述べたように、前置詞句を受ける中性代名詞クリティックは目的語代名詞クリティックと異なるふるまいを示すが、前置詞句と目的語名詞句が根本的に異なるのは、名詞句が動詞によって素性照合されねばならないのに対し、前置詞句はその必要がないということである。これは、動詞句や副詞句等が照合を受ける必要がないのと全く同じである。つまり、前置詞という特定の機能を担う語が主要部であるため、それ自体で文における機能が規定され、他の要素に依存する必要がないのである。従って、動詞との照合という形で認可する必要がないということに

なる。

この前置詞句自体が持っている特性が、その代用形である中性代名詞クリティックにも継承されると考えてみよう。すると、前置詞を受ける中性代名詞クリティックの場合にも、格照合が必要ないということになる。本稿では、中性代名詞“en”と“y”が目的語クリティックとふるまいを異にするのは、まさにこの違いに起因すると考える。そこで、“en”と“y”の統語的特性としての認可条件を次のように仮定する。

- (25) 前置詞を受ける中性代名詞クリティック“en”、“y”は、動詞複合体に付加されねばならないが、素性照合は受けない。

動詞複合体への付加の条件は、Kayne(1991)⁽¹⁸⁾におけるクリティック一般に関する条件と基本的に同一である。また、クリティックの付加は、Baker(1988)⁽¹⁹⁾において主張されている主要部移動である。このように考えれば、(26)(=8))のように、“en”や“y”が使役構文の補文の動詞にクリティック化できるのはごく自然に説明される。

- (26) a. On essaiera de faire en parler ton ami.
one will-try of(to) make of-it speak your friend
b. Elle fera en sortir Jean.
she will-make of-it go-out
c. Marie a fait y acheter ces livres à
made there buy these books to
Jean.
d. Marie a fait y aller Jean.
made there go
e. Cela fait y penser tout le monde.
that makes to-it think everybody

前置詞句の構造的な位置は、Chomsky(1995)に従って、V と姉妹関係にあると考える。すると、例えば(26b)の文の基底構造は(27)のようになる。

- (27) [TP T [_{VP} NP [FAIRE [_{VP} NP [V PP]]]]]

この構造で、PP が中性代名詞クリティックに対応する。中性代名詞クリティックはクリティックとしての性質上、他のクリティック同様、動詞複合体に付加しなければならない。最終的な LF での構造は次のようになる。“cl”は中性代名詞クリティックを表わす。

- (28) [TP NP_i [FAIRE]_i-T [VP NP_j [t_i [cl_k-t_i-V_m [VP t_j [t_m t_k]]]]]]

中性代名詞クリティックがクリティック化する移動先として最も近い動詞複合体は、補文の動詞となる。従って、補文の動詞への移動は MLC を満たす。また、(25)の条件により、中性代名詞クリティックは照合を受ける必要がないので、主文の動詞句の指定部に移動する理由がない。このため、この派生は適格となるのである。

では、(29)=(9)のように“en”や“y”が主文の動詞にもクリティック化が可能であるのはなぜであろうか。

- (29) a. On essaiera d'en faire parler ton ami.

of-it

- b. Elle en fera sortir Jean.

of-it

- c. Marie y a fait acheter ces livres à Jean.

there

- d. Cela y fera aller Jean.

there

- e. Cela y fait penser tout le monde.

to-it

もし(27)のような基底構造から、直接クリティックの移動が行われるのであれば、補文の動詞句内の位置から主文の動詞への移動は不適格となるはずである。補文の動詞がクリティック化できる要素として存在するため、主文の動詞への移動は MLC の違反となるからである。では、(29)はどのような派生によって生成されるのであろうか。いくつかの可能性が考えられるが、本稿では、一つの可能性として、項でない前置詞句が基底構造において補文の動詞句に付加している形で生成が可能であると考ええる。この構造は、(30)に示される。

- (30) [TP T [VP NP [FAIRE [VP [NP [...V...] PP]]]]

この構造では、PP から最も近い動詞複合体は主文の動詞ということになる。前置詞句を受ける中性代名詞クリティックは格照合を受ける必要がないので、クリティック化のために動詞複合体に移動するだけで認可条件が満たされる。LF での構造を次に示す。

- (31) [TP NP_i [cl_k-FAIRE]_i-T [VP NP_j [t_i [t_i-V_m [VP [t_j [...t_m...] t_k]]]]]]

この場合、中性代名詞クリティックが主文の動詞“faire”に

付加した後、“faire”とともに T に移動する派生も可能となる。従って、(29)の文も適格な派生をもつことになり、文法的なのである。

ここで予想されるのは、(30)のように動詞句に付加する形で生成される構造が許されない前置詞句、すなわち補文の動詞と結びつきが強い前置詞句を受ける“en”や“y”は、このように主文の動詞へのクリティック化する語順が非文となるということである。実際、項である前置詞句を受けている(32)=(10))がその例に当たる。

- (32) a. *Jean y fera comparer cette sonatine à
to-it will-make compare this sonatina to
Paul.

- b. *Jean y fera mettre ce livre à Pierre.
there will-make put this book to

- c. *Jean en fera déduire cette conclusion à
of-it will-make deduce this conclusion to
Lucie.

これらの例では、それぞれ中性代名詞クリティックが補文の動詞の項として機能している。従って、これらの文の基底構造としては、前置詞句が補文の動詞と姉妹関係にある(27)のみが許され、補文の動詞句の上位の位置に付加している(30)が許されないために、(32)が非文となると考えることができる。ここでの分析は、いくつか考えられる可能性の一つであり、更に検討する必要があるものである。しかし、中性代名詞クリティックが動詞句内で素性照合を受ける必要がないという統語的特性を仮定し、適切な動詞句の構造を設定することによって、使役構文における中性代名詞クリティックの、目的語クリティックとは明らかに異なる複雑な分布が、この構文に特定の移動規則等を仮定することなく簡潔に説明されることが示された。次の節では、今後考察を進めていく上で考慮に入れるべき例を挙げる。

6. 他のクリティックとの共起及び“en”の他の用法

本稿では、前置詞句の代用表現としての中性代名詞クリティックに対する分析を提示したが、他のクリティックと共起する場合、あるいは“en”が前置詞句以外の要素を受け場合にも複雑な分布が生じる。本節では、これらの現象を観察し、今後の課題とする。

一つ目の現象は、項として機能する中性クリティックに関してであるが、項としての中性クリティックは主文の動詞にクリティック化できないと述べた。しかし、これには例外が存在し、もし補文の主語がクリティック化されれば

中性クリティックも主文の主語にクリティック化が可能となる。

- (33) a. Jean leur y fera comparer cette
 them to-it will-make compare this
 sonatine.
 sonatina
 “ジャンは彼らにこのソナチネをそれと比較させるだろう。”
- b. Jean leur y fera mettre ce livre.
 them there will-make put this book
 “ジャンは彼らにこの本をそこに置かせるだろう。”
- c. Jean leur en fera déduire cette
 them of-it will-make deduce this
 conclusion.
 conclusion
 “ジャンは彼らにそこからこの結論を出させるだろう。”

(Rouveret and Vergnaud(1980))

つまり、補文の主語のクリティック化が、補文の動詞の項である中性クリティックのクリティック化の領域を広げるのである。この現象を考える場合には、補文の主語としてのクリティックの認可条件と中性クリティックの認可条件との関係を明確にしなければならない。

補文の他動詞の主語である *causee* が代名詞クリティックとして生起する場合には与格形クリティックとなるので、対応する名詞句は前置詞“à”でマークされるものと考えられる。与格形クリティックは“[par]+名詞句”には対応しないからである。

4 節で述べたように、与格形クリティックは主文の動詞句において格照合を受ける。従って、*causee* が主文の動詞にクリティック化するのは予想される通りである。(33)の現象は、*causee* としての格照合が、何らかの形で補文の項としての中性代名詞クリティックに影響を与える可能性を示唆している。一つの可能性として、次のように考えることができよう。中性代名詞クリティックの認可条件は、動詞複合体に付加されるだけで満たされる。ここで、中性代名詞クリティック自身が直接動詞に移動しなくても、結果的に動詞複合体に付加していればよいとする。中性代名詞クリティック自身は、補文の主語である *causee* に移動する。この移動は MLC を満たす。次に、*causee* は主文の動詞句で格照合を受けた後、中性代名詞クリティックを伴ったまま、最終的に主文の動詞複合体に付加することになる。すると、結果的に中性代名詞クリティックも主文の動詞に付加され、認可条件を満たすことになる。この考え方

は一つの可能性に過ぎず、今後更に検証する必要があるが、中性代名詞クリティックの特殊性を示唆するものと言えるよう。

二つ目の現象は、“en”がもつ、前置詞句を受ける以外の用法、すなわち名詞句の一部もしくは全部を受けるという用法である。この用法で特に注目すべきは、*causee* である与格名詞句の一部を“en”で受けるのは不可能であるということである。(34)は *causee* の一部を“en”で受けたものである。

- (34) a. *Le capitaine en a fait boire ce vin à
 the captain of-them made drink that wine to
 trois.
 three
 “艦長はその中の3人にそのワインを飲ませた。”
- b. *Elle a fait s'en acheter des chaussures
 she made SE of-them buy some shoes
 à trois.
 to three
 “彼女はその中の3人に自分自身の靴を買わせた。”
- (Kayne(1975))

使役構文でも、(35)のように対格で標示される *causee* や補文の目的語の場合には、その一部を“en”で受けることが可能である。

- (35) a. Le capitaine en a fait ramper trois dans
 the captain of-them made crawl three in
 la boue.
 the mud
 “艦長はその中の3人に泥の中を這わせた。”
- b. Sa mère est arrivée à lui en faire
 her mother managed to him of-them make
 s'acheter une paire.
 self buy a pair
 “彼の母はなんとか彼に自分用にそれを一足買わせた。”
- (Kayne(1975))

“en”の名詞句の一部を受ける用法に関しては、従来 Pollock(1986)⁽²⁰⁾や Elliott(1986)⁽²¹⁾等、いくつかの議論があるが、いずれも現在の理論的枠組みからは問題点が存在する。名詞句の一部及び全部を受ける“en”の認可条件は、前置詞句を受ける場合と異なる可能性が大きく、簡単に結論づけることはできないが、一つの可能性として、与格形で生起する *causee* は、対格形で生起する *causee* とは異なり、一種の島を形成することが考えられる。与格形は、名

詞句の場合には前置詞“à”でマークされることから、前置詞を伴わない対格形の名詞句と統語的に異なる特性を持つことも不自然なことではない。この島の形成が何に起因するか等の問題は今後の課題としたい。

7. まとめ

本稿では、中性代名詞クリティックのうち、前置詞句を受ける“en”、“y”の統語的特性を、動詞“faire”を用いる使役構文における分布を基に、考察した。本稿が提案する、統語的特性としての認可条件は次のものである。

- (36) 前置詞を受ける中性代名詞クリティック“en”、“y”は、動詞複合体に付加されねばならないが、素性照合は受けない。

重要なのは、中性代名詞クリティックは、目的語クリティックと異なり、動詞句で格照合を受けないので、使役構文における分布が目的語クリティックと異なるということである。

本稿の議論は、今後の中性代名詞クリティックの研究における初期段階であり、中性クリティック全体の統語的特徴を詳細に議論したものではない。あくまでも、中性代名詞クリティックの特定の用法に関する考察であり、一部触れた“en”の不定の名詞句や名詞句の一部を受ける用法に対する考察は、扱っていない。中性代名詞クリティックは、目的語を受けるクリティックと異なり、かなり動詞の語彙的性質と連動する部分があるので、同じ構文でも動詞の選択によって文法性が変わる場合が多い。これは、中性代名詞クリティックそのものがかなり広い用法を含んでいることにも起因すると思われる。従来の研究でも、中性代名詞の特定の用法に関する分析は多いが、包括的に分析しているものはそれほど多いとは言えず、また十分説得的な議論は、まだ提示されていないというのが現状である。このような状況を踏まえ、今後中性代名詞クリティックの包括的研究が大きな課題となろう。

文献

- (1) Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, The MIT Press, Cambridge.
- (2) Rouveret, Alain and Jean-Roger Vergnaud (1980) “Specifying Reference to the Subject: French Causatives and Conditions on Representations,” *Linguistic Inquiry* 11, 97-202.
- (3) Bailard, Joelle (1982) “The Interaction of Semantic

- and Syntactic Functions and French Clitic Case Marking in Causative Sentences,” In Paul J. Hopper and Sandra A. Thompson (eds.), *Syntax and Semantics* 15, Academic Press, San Diego.
- (4) Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax—A Government-Binding Approach—*, D. Reidel Publishing Company, Dordrecht.
- (5) Goodall, Grant (1986) “Case, Clitics, and Lexical NP's in Romance Causatives,” In Carol Neidle and Rafael A. Nunez Cedeno (eds.), *Studies in Romance Languages* Foris Publications, Dordrecht.
- (6) Guasti, Maria Teresa (1996) “Semantic Restrictions in Romance Causatives and the Incorporation Approach,” *Linguistic Inquiry* 27, 294-313.
- (7) Guasti, Maria Teresa (1997) “Romance Causatives,” In Liliane Haegeman (ed.), *The New Comparative Syntax*, Longman, New York.
- (8) Jaeggli, Osvaldo (1982) *Topics in Romance Syntax*, Foris Publication, Dordrecht.
- (9) Kayne, Richard S. (1975) *French Syntax*, The MIT Press, Cambridge.
- (10) Reed, Lisa (1990) “Adjunction, X0 Movement, and Verbal Government Chains in French Causatives,” In T. green and S.Uziel (eds.), *MIT Workig Papers in Linguistics Vol.12*, 161-176.
- (11) Rosen, Sara Thomas (1989) “The Argument Structure and Phrasal Configuration of Romance Causatives,” In *MIT Working Papers in Linguistics Vol.11*, 212-227.
- (12) Zubizarreta, Maria Luisa (1985) “The Relation between Morphophonology and Morphosyntax: The Case of Romance Causatives,” *Linguistic Inquiry* 16, 247-289.
- (13) Zubizarreta, Maria Luisa (1986) “Le Statut Morpho-Syntaxique des Verbes Causatifs dans les Langues Romanes,” In Ronat & Couquaux (eds.), *La Grammaire Modulaire*, éd Minuit, Paris.
- (14) Pollock, Jean-Yves (1989) “Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP,” *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- (15) Roberts, Ian (1991) “Excorporation and Minimality,” *Linguistic Inquiry* 22, 209-218.
- (16) Larson, Richard K. (1988) “On the Double Object Construction,” *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- (17) Kitagawa, Yoshihisa (1994) “Shells, Yolks, and Scrambled E.g.s,” In *NELS* 24.

- (18) Kayne, Richard S. (1991) "Romance Clitics, Verb Movement, and PRO," *Linguistic Inquiry* 22, 647-686.
- (19) Baker, Mark (1988) *Incorporation*, University of Chicago Press, Chicago.
- (20) Pollock, Jean-Yves (1986) "Sur la Syntaxe de EN et le Paramètre du Sujet Nul," In Ronat & Couquaux (eds.), *La Grammaire Modulaire*, éd Minuit, Paris.
- (21) Elliott, W. Neil (1986) "On the Derivation of en-Clitics," In Hagit Borer (ed), *Syntax and Semantics* 19, Academic Press, San Diego.